

令和7年度敦賀市中池見湿地保全活用協議会 第1回会議（要旨）

日時：令和7年7月1日（火）14：00～16：00

場所：敦賀市役所2階 講堂

出席者：会員9名、顧問1名、傍聴1名

リモート：顧問1名、傍聴3名

【開会】

○令和7年度敦賀市中池見湿地保全活用協議会第1回会議の開催にあたり、会長より挨拶をいただいた。

（会長）

・北陸新幹線が開業して1年ということで、新しい来訪者層というものが開拓されていくと期待している。この保全と活用を両立していきながら、この中池見湿地がますます地域の皆さんにとっての財産として多くの方にその価値を知っていただけるように、これからも関係の皆様のご協力の下で進めていければと思っている。

【議事1】中池見湿地への来園者数等の状況報告について

○資料1に基づき説明（事務局）

○質疑応答まとめ

（会員）

・中池見保全活用基金について、令和5年6年など何かのお金が入らない限り増加することにはならない。加算されているものがあるならその項目を入れないといけない。もう1点は、教育委員会の所管に移してと言っている。

（会員）

・目減りしていないのは、経費がふるさと納税から直接充当されていて基金を取り崩していない年度や、ふるさと納税分を基金に積み立てていた年度があるため、このような基金残高の推移となっている。現在はふるさと納税を積み立てないという市の方針があり、毎年経費が掛かるので、基本的にはまずこの基金を取崩していく。そうになっていくといずれはゼロになるが、中池見の経費の財源については、あくまで当市として各経費の財源をどうするかという話であり、そこは当然市の中で協議することであり、何か事業がなくなるということにはならない。今後基金がなくなっていったらふるさと納税が充当されなくなった時、維持管理が保たれるかという懸念については、しっかり必要な経費は確保していく方針である。

（会長）

・ご発言の委員としては、ふるさと納税の使い道を中池見で使うように納税されてるのであれば、ただ単に維持するだけでなく、プラスアルファの使い方もしかるべきじゃないかという、そういう御意見かもしれない。

（事務局）

・中池見に用途が限定されていて、そこに直接充当という時代があったが、今は用途を定めない制度なので、ふるさと納税の中でどれだけを経費に充てるかという話は、それは市の中で、全体で見るという話になる。この基金がなくなったりふるさと納税が充てられなくなったりした時に、中池見にかかる経費がゼロになるという話では決してないということは御理解頂きたい。厳しい財政事情ではあるが、保全活動に必要な経費というのは求めていく。

（会員）

・まず1点目、その財源の使われ方に変更があったことは理解した。ただ、毎年維持管理の事業だけ

でも1千万を超えて使われている。そこへふるさと基金ではなくて、一般財源のほうから必要経費として支出しているので、横ばいが出るという理解でよい。

・2点目について、来園者数について、藤ヶ丘と檜曲口、それに天筒山からの3か所の入りがあるが、それぞれどこが増えたのか、それがなぜかということを知りたい。県外からの方の足を向けるように何かできないか。金ヶ崎から歩くルートもある。その分析を検討いただきたい。また出入りの区別がわかるようなセンサーもあるといい。

(事務局)

・今は基金がまずあるので基金を取崩していき、例えば去年だと木道の修繕に係る経費など、突発的なものについては、ふるさと納税を充てるような形である。現状では一般財源は捻出していない。また、ふるさと納税は経常経費、いわゆる毎年かかるような経費には、基本的に充てていない。理由は、ふるさと納税というものは毎年確実にあるかというところ未確定なためである。

・来園者数については、各入口に人感センサーがあり、そのカウント数を元に集計している。出入りの区別は出来ないため、3か所それぞれの数値はあくまで目安である。

【議事2】後谷湿地再生検討分科会の検討状況について

【議事3】自然復元措置の取り組みについて

○資料2、3に基づき説明（分科会及び鉄道・運輸機構）

○質疑応答まとめ

(会員)

・猛禽類の調査は9、10、11月は調査されていないが、秋はしていないのか。

(鉄道・運輸機構)

・繁殖期のための調査である。

(会員)

・マンガン廃坑について、人工的に水を入れる方法をしていただければと思う。そういったことを検討したことはあるのか。

(鉄道運輸機構)

・影響低減のため、ルート変更をしたりトンネルの中に入れられないようなつくりにした。沢の水は枯れてしまったが、その代償措置として水田だった場所の盛土を撤去して湿地を復元することになった。マンガン廃坑については、人工的に水を入れることも話としてはあったが、外来的な生物が入る危険性が高いというのが、フォローアップ委員会の議論であった。

(会員)

・ミティゲーション5原則に沿って検討して、今回の代償措置に至った。山の水を入れるのは難しい。川から導水する議論もあったが、水温・水質などの懸念があった。現状は推移を見守る状況である。

(会員)

・ため池はだんだん埋まっていくと思うが、どのような管理になるのか。大変かと思う。

(鉄道運輸機構・会員)

・深さは40cm程度。湿地全体の保全作業は現在は敦賀市から委託されて中池見ねっが行っており、この池についても湿地全体の管理の中で泥上げなども行っていく計画である。

○引き続きモニタリング調査の結果について、資料3に基づき説明（鉄道・運輸機構）

○質疑応答まとめ

(会員)

・令和5年より以前については、フォローアップ委員会の中で報告されていたが、今回の結果を委員会の先生方と共有する機会はあるのか。

(鉄道運輸機構)

・今回の報告は、この協議会で公表する場をいただけたので初めて公表させていただいた。今後鉄道運輸機構のホームページには載せていきたいし、広く情報を出していきたい。フォローアップ委員会の先生方の会を開くことは考えていないが、情報は展開していきたい。

(会員)

・水文調査について、場所によって高い位置については回復していて低いところは回復傾向でないように見える。

(鉄道運輸機構)

・全体としては回復傾向にある。横ばいなし回復傾向であり、回復していくものとみている。

【議事4】その他

(会員)

・中池見ねっとで特定外来生物についてのパンフレットを作成したので配布する。希望があれば残部があるのでおっしゃっていただきたい。

(会員)

・中池見湿地の外来種の現状についてお聞きしたい。

(会員)

・特に優先順位が高い特定外来生物を中心に対策を行っている。8種類見つかっているが、多くは初期防除に成功している。アカミミガメ、ウシガエル、オオバナミズキンバイ、ナガエツルノゲイトウについては現在定着を防げている。今、特に問題になってるのは引き続きアメリカザリガニと、ヌートリアであり、ヌートリアは、県内でも嶺南地区を中心に拡大し、敦賀市が分布の最前線となっている。今は爆発的に数が増えている状況ではないのでこの分野の対策を進めていきたい。オオバナミズキンバイ、ナガエツルノゲイトウという外来植物については、ボランティアや私たちも見回りをしながら、見つけ次第対策している。

(会員)

・モニタリング調査について、一般的な環境アセスメントとの違いがあれば説明いただきたい。

(鉄道運輸機構)

・調査項目は変わらないが、中池見については環境管理計画というものを定めていろいろな方と協働しながら、また情報を広く公表していくところが、特色があるのかと思う。

(会員)

・今回、自然復元措置の再生ということだが、中池見湿地全体の課題として、なかなか市民の理解が少ない。今回の機会をとらえて、地元市民の理解を深めるような取組にしなければいけない。他地域で成功している取組を紹介していただけるとありがたい。

(鉄道運輸機構)

・新幹線で言うとほかに事例がない。環境管理計画自体が初なので、逆にそれが売りになるかもしれない。

(会長)

・それでは本日議事は以上となる。

(散会)